

新座中央図書館の日本の小説、読みたい本が見つからないので、今まで手に取ったことの無い作家の本でも読もうかと思った。小生には未知の作家で、且つ分厚い本ばかりであったので、10冊余りが並んでいたのは知っていたが、手に取ることすらなかったのだ。

その作家は楡周平氏である。

1 楡氏の紹介

ウィキペディア (Wikipedia) によれば、1957年岩手県生まれ。慶應義塾大学大学院修了後、米国企業日本人 (写真業界の大手コダック) に入社し、80億円に及ぶ物流プロジェクトを手がけていた。1996年、在職中に犯罪小説『Cの福音』を宝島社より出版し、30万部を売り上げる。その後は小説執筆に専念するために米国企業を退社。

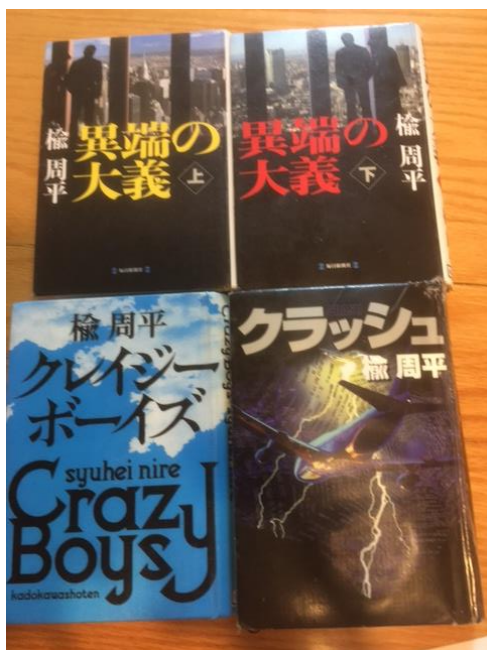
スリラーとハードボイルドとアクションを取り入れた作品群が特徴である。その後は『無限連鎖』などで「このミステリーがすごい!」からも注目されるようになったが、2005年に『再生巨流』を発表してからは経済小説をメインに執筆するようになり、有川崇を主人公にした『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・東京』や、山崎鉄郎を主人公にした『ブラチナタウン』などのドラマ化された人気作品を刊行した。

これらの経済小説は、会社員時代の体験を作家としての財産にして執筆しているが、42歳から大学院で学ぶなど、付け焼き刃ではない情報収集を続けている。

2 4月以降読了した楡作品

4月初め、厚過ぎるからどうかと思いつつ、氏の作5点を借り出した。①和僑 ②ラストフロンティア ③ラストワンマイル ④介護退職 ⑤ガリバー・パニックである。これが読みだしたら、止められない。一気に読了してしまった。作者の筆力に脱帽だ。

魅了されてしまい、読み終わったら以下の作品を借り出して読んだが、これらも素晴らしい経済小説だった。⑥クレイジーボーイズ ⑦異端の大義(上)(下) ⑧クラッシュだ。



3 作品紹介(ネット及び筆者)

(1) 和僑(315p)

東北の小さな町、若者が町を離れて、過疎化、住民の高齢化の波に襲われ、主要産業である農業、畜産業の後継者不足という謂わば限界集落にあって、町の将来に新しい発想で取り組む男の物語、現代の日本の田舎の抱える問題を鋭く指摘し、挑戦の重要性を納得させる一冊だ。

(2) ラストフロンティア(299p)

2016年末に可決成立した「特定複合観光施設区域整備推進法」(カジノ法)に関連する話題である。お台場が開業するカジノ場の企画を任された主人公は、根強い官僚の抵抗にあいながらも、世界のどこにもない賭博場を構想する。ギャンブル経済の裏表を楽しめる痛快起業エンターテインメント。

ト。

(3) ラストワンマイル(365p)

草創期から応援してきたネット通販企業に裏切られた流通大手に勤務する主人公が新しい通販ビジネスを考案して、裏切った通販企業と戦い、勝利する。何かと話題の多い流通業界の物語だ。

(4) 介護退職(235p)

東京で働く子どもと地方で暮らす親。世界を股にかけて活躍するメーカーの部長に田舎の母が倒れたとの報、介護をどうする、仕事はどうする等々身につまされる話。

(5) ガリバー・パニック(314p)

身の丈 100m の巨人の出現、自衛隊も出動する大騒ぎとなる。巨人とは意思の疎通が出来ると判明。危害はないとわかった途端、官僚たちは管轄官庁を押しつけあい、一方では金儲けを考えて算盤を弾く者あり、様々に考えさせられる。

(6) クレイジーボーイズ (444p)

青色発光ダイオード事件が提起した問題がテーマ。画期的な特許に帰属をめぐって争う発明した父が謀殺される。息子は父の真相と追い、復讐を誓う。長編謀略サスペンス。

(7) 異端の大義(上) 382p 異端の大義(下) 414p

同族会社である総合家電メーカー東洋電器産業のエリート社員が、会社の経営不振からたどる数奇な運命(同期の罨、転属そして反撃)。“日本的”同族会社の今日を予見した大河小説。

(8) クラッシュ 605p

インターネットに自分の全裸写真をアップされ、ネット社会への復讐を誓った天才女性プログラマー。高度 32000 フィートの上空で突如、最新鋭機が操縦不能に陥る。システムを正常に戻す鍵は指定の HP 内に隠されていると犯行声明。最新鋭機に仕掛けられたサイバーテロとその真の狙いは何か。現代ネット社会の問題を告発

4 魅力の数々

- ①現代的テーマであり、関心大なること。
- ②物語の展開が読めず、山あり谷あり、どう展開するか興味津々、息をもつかせぬ展開
- ③主人公のキャラクター 不屈、挑戦、豊かな発想
- ④結末の感動性

5 食わず嫌いでは駄目だ！

馴染みのない作家で、分厚い単行本となると敬遠したくなるものだが、これを食わず嫌いと云わずして何と云う。

本の面白さは、テーマと作家の筆力に負う処極めて大。小生の筆力たるや、その域には達し得ず。

未読の本を読み漁ろう。(F)